

多胎育児に関する実態及び母親の意識調査  
～単胎育児との比較

分担研究「多胎児に対するケアのあり方に関する研究」  
研究協力者：服部 司  
協同研究者：中島健夫、高橋伸浩

要 約：多胎育児をとりまく家庭、医療、社会福祉状況の把握のため、多胎児を出産した母親に多胎妊娠、分娩に対する感情、育児に関する実態と意識調査を行ない、同様の調査を新生児集中治療を受け退院した児の母親に行ない比較し、多胎育児の問題点の抽出を試みた。多胎妊娠の母親は妊娠への不安を持つことがより多い。多胎への育児援助は単胎より多くなされていたが、多胎児の母の精神的、肉体的疲労はより強く長期にわたる傾向があった。この疲労は育児の楽しさや充実感と逆相関していた。また、人生設計の変更を余儀なくされたと感じたり、経済的負担や住居への不満をもつことがより多かった。育児支援は家族、親戚が主になってなされており、医療、社会、福祉からの的確な情報提供、支援はまだ十分になされておらず今後の課題である。

見出し語：多胎妊娠、多胎育児、周産期因子、意識調査

緒言：近年多胎の出生が増加してきている。この多胎児は早期産で出生することが多く、また出生後に種々の医療処置を必要とすることも多い。多胎育児を取り巻く状況の把握のために多胎児を出産した親の育児に関する実態と意識調査を行い、同様の調査を単胎で新生児治療施設を退院した児について行い比較検討した。

研究方法：調査は1988年から1992年の間に市立札幌病院産婦人科で出生した多胎児、及び同未熟児センターに入院した多胎児の母親、及び1991～1993年同未熟児センターを退院した単胎極小未熟児の母親への郵送によるアンケートで行った。項目数53、記載は原則的に選択式とし一部記述欄も設けた。

研究成績：アンケートは多胎92通のうち37通（40%）、単胎児106通のうち52通（49%）の回収を得た。多胎児の在胎期間は平均33週と5日、出生時体重平均は1647gで、単胎児のそれは28週と2日、1024gであった。

家族構成は両親と子供のみ「核家族」は多胎/単胎（以下AA/BBは多胎/単胎の比較として記述する）75.6%/75.5%、父親の年齢35.7/35.4才、母親の年齢32.7/34.6才であった。

過去の不好治療を受けていたものは16.2%/15.4%であった。多胎妊娠で不好治療の有無の2群で多胎妊娠と知らされた時の母の感情を比較すると「単胎よりうれしかった」は前者で33.3%、後者で29.0%で両群に差はなかった。両親ともに「単胎よりうれしかった」と答えたものはわずか18.9%であった。「多胎妊娠について怒りを持った」という否定的回答は無かった。一方単胎妊娠で不好治療歴のある母親の妊娠を知ったときの喜びは87.5%であり不好治療歴のない母の70.5%を上回っていた。多胎妊娠告知にたいする反応は初産の母親では25%、経産の母親で40%が「単胎よりうれしかった」と回答している。反面「妊娠そのものに対する強い不安」は多胎母/単胎母において40.6%/21.4%で、多胎妊娠は不安持つことが多く、この不安は経産婦で47.0%と初産婦の35.0%を上回っており単胎経産婦の強く不安を持った10.7%と対象的である。

妊娠早期において早産の可能性についての説明を受けた母は多胎では87.5%に対して単胎では25.0%に過ぎなかった。

早産予防のための入院は67.0%/75.0%であった。この入院中の母の気持ちは「頑張ろうと思った」という肯定的なものが92.3%/94.2%とほとんどであったが、一方妊娠に否定的になったり、怒りを感じた母親は12.0%/13.4%であった。入院中の安静行動制限が苦痛であったとの回答は50.0%/86.5%であり、これは入院期間によると思われる。

出産時の気持ちを以下の項目について質問しカッコ内の母親（多胎/単胎）が強く肯定している：「うれしかった」（82.8%/82.7%）、「ほっとした」（41.1%/46.2%）、「育児の不安」（25.7%/26.9%）、「未熟児への不安」（60.0%/82.7%）、「子供の健康に対する不安」（54.2%/82.7%）。

出産後母と子が別の病院に別れたものは（25%/28%）、同じ病院にいたもの（75%/72%）であった。新生児がNICUに入院しているときの母親の「児が手元にいらない不安」（50%/50%）、病状に対する不安

（72%/75%）は多数に認められたがこれは母親同病院か否かとは関係がなかった。

退院後も何らかの形で母乳栄養を与えた母は多胎で78%であったが児の退院が生後1ヶ月以上の母ではその率は35%と低下していた。

単胎児ではその傾向はさらにはっきりし何らかの母乳栄養は42.3%であった。

退院後育児の手伝いをしてくれた人は（重複回答あり：なし18.9%/9.6%、父62.1%/61.5%、母方の祖母45.9%/48.1%、父方の祖母37.8%/26.9%、母方のおば37.8%/7.7%、父方のおば0%/1.9%、ベビーシッター0%/0%）であった。

父以外の育児協力者の協力期間は、退院後1ヶ月以下41.4%/56.8% 1-3ヶ月24%/16.2%と短期間の援助がほとんどを占めていたが、6ヶ月以上は40.9%/16.2%と多胎の方が長期間の支援を受けていた。

一方父親が育児に「積極的に」協力したと答えた母親は60.3%/43.6%であり多胎の家族の支援はより多くなされていた。

育児相談はだれにしたか（重複回答）：「病院で」24.3%/34.6% 「病院へ電話」21.6%/23.1%、「保健所」5.4%/19.2%、「保健所へ電話」8.1%/30.3%、「祖母や親戚」24.3%/30.3%、「友人」24.3%/7.7%、「双子の会」0%/0%、「その他」10.8%/9.6%であった。保健所からの訪問は83.3%/81.0%に行われていた。

生後1年間の育児に対する母親自身の自己評価で明らかな肯定を示した割合を右の表に示す。

	多胎	単胎
充実感を持った	25.0%	53.8%
頑張ろう!と思った	67.6%	75.9%
発育が不安だった	40.6%	57.7%
疲れ切った	68.0%	36.5%
人生設計が変わった	40.6%	7.7%
肉体的疲労のピーク	58.8%	26.7%
子供に否定的気持ち	9.3%	3.8%
医療に不信感を持った	0%	1.9%

多胎の母親においては「疲れ切った」「人生設計が変わった」「育児から逃避的な気持ちを持った」の割合が大きい。

肉体的疲労のピークは平均9.0ヶ月/5.0ヶ月、精神的疲労のピークは平均10.0ヶ月/5.5

ヶ月で多胎の母親の疲労は長期化していくことがうかがえる。多胎の母に対して「平等の愛情を多胎児のそれぞれに対して持てたか」との質問に77.1%が肯定22.9%が否定している。一方単胎で兄弟姉妹のある児の親は「他の子と同じように愛情を持ったか」という質問に82.0%が肯定している。

家族の年収は多胎/単胎に差はなかった。多胎であるため実家から経済的援助を受けたという家族は17%であったが、単胎では育児のために上記の援助を受けたのは3.8%に過ぎなかった。家計に占める育児費用の割合は多胎で大きかった。住居スペースへの不満は49.1%/29.4%であった。

考察と結論：多胎児は早期産で生まれ、新生児集中治療を受けることも多い。多胎育児を巡る問題を明らかにするため、極小未熟児との比較を行い多胎児を抱える家族にはより肉体的、心理的、経済的により大きな負担がかかっていることが示された。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:多胎育児をとりまく家庭,医療,社会福祉状況の把握のため,多胎児を出産した母親に多胎妊娠,分娩に対する感情,育児に関する実態と意識調査を行ない,同様の調査を新生児集中治療を受け退院した児の母親に行ない比較し'多胎育児の問題点の抽出を試みた.多胎妊娠の母親は妊娠への不安を持つことがより多い.多胎への育児援助は単胎より多くなされていたが,多胎児の母の精神的.肉体的疲労はより強く長期にわたる傾向があった.この疲労は育児の楽しさや充実感と逆相関していた.また,人生設計の変更を余儀なくされたと感じたり'経済的負担や住居への不満をもつことがより多かった.育児支援は家族.親戚が主になってなされており,医療,社会,福祉からの的確な情報提供,支援はまだ十分になされておらず今後の課題である.